

# グローバル人材の育成に関する研究

— 国際バカロレアの教育手法を参考にして —

齋藤麻紀<sup>1</sup> 小澤美紀<sup>1</sup>

グローバル化に対応した素養・能力の育成のための国際的な教育プログラムとして、国際バカロレアが注目されている。本研究では、国際バカロレアの教育の良さを高等学校段階の学びに取り入れるという視点に立ち、その教育理念や手法から、全ての学校の参考になるグローバル人材の育成の在り方を探り、高等学校及び中等教育学校におけるグローバル教育の推進に資することを旨とした。

## はじめに

国は、平成28年12月の「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について(答申)」(以下、「答申」という)の中で、現代的な諸課題に対応して求められる資質・能力の一つを「グローバル化の中で多様性を尊重するとともに、現在まで受け継がれてきた我が国固有の領土や歴史について理解し、伝統や文化を尊重しつつ、多様な他者と協働しながら目標に向かって挑戦する力」(中央教育審議会 2016 p. 41)としている。

そのような資質・能力を育成するための国際的な教育プログラムとして「国際バカロレア(International Baccalaureate: IB)」(以下「IB」と表記することもある)が国内で注目を集めている。スイスのジュネーブに本部を置く国際バカロレア機構により認定を受けたIB認定校は、世界150以上の国や地域に約5,000校ある(平成30年11月現在)。また、日本国内における国際学校(インターナショナルスクール)と学校教育法第一条に定められる「学校」(いわゆる「一条校」)を併せたIB認定校数は60校(平成30年11月現在)である。学習指導要領とIB教育を両立した形での普及が進み、一条校のIB認定校が増加している。

なお、本県の県立学校については、認定に向けた取組を進めてきた横浜国際高等学校が、平成31年2月21日に国際バカロレア校の認定を受け、平成31年度に国際科国際バカロレアコースを開設することとなった。

IBの教育理念及びカリキュラムと、日本の教育政策の方向性は親和性が高いとされている(国際バカロレアを中心としたグローバル人材育成を考える有識者会議 2017)。したがって、IBの教育理念や手法から、各学校の教育活動を更に豊かなものにするためのヒントが得られると考える。

## 研究の目的

国際バカロレア(IB)教育の良さを高等学校段階の

学びに取り入れるという視点に立ち、その教育理念や手法から、全ての学校の参考になるグローバル人材の育成の在り方を探り、高等学校及び中等教育学校におけるグローバル教育の推進に資する。

## 研究の内容

### 1 グローバル人材の育成の取組

#### (1) グローバル人材とは

「グローバル化」は、「情報通信・交通手段等の飛躍的な技術革新を背景として、政治・経済・社会等あらゆる分野で『ヒト』『モノ』『カネ』『情報』が国境を越えて高速移動し、金融や物流の市場のみならず人口・環境・エネルギー・公衆衛生等の諸課題への対応に至るまで、全地球的規模で捉えることが不可欠となった時代状況」(グローバル人材育成推進会議 2012 p. 8)と定義されている。また、大迫は、IBにおけるグローバル(地球規模的)とインターナショナル(国際的)の考え方について、「『国際的』とは国を構成要素とし、国と国の関係にもとづく視点であるのに対し、『地球規模的』とは、地球を一つの全体とした視点である」(大迫 2016)とした上で、国の枠組みを越えた様々な問題が出現する現代社会においては、どこまでが国の問題でどこからがグローバルな問題なのか境界を引くのが難しく、そもそもそのような整理の仕方自体が通用しないのかもしれないと述べている。

#### 第1表 「グローバル人材」の概念

「グローバル人材」に求められる要素
要素Ⅰ：語学力・コミュニケーション能力 要素Ⅱ：主体性・積極性、チャレンジ精神、協調性・柔軟性、責任感・使命感 要素Ⅲ：異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティー
「グローバル人材」に限らずこれからの社会の中核を支える人材に共通して求められる資質
幅広い教養と深い専門性、課題発見・解決能力、チームワークと(異質な者の集団をまとめる)リーダーシップ、公共性・倫理観、メディア・リテラシー等

(グローバル人材育成推進会議 2012 p. 8より作成)

こうした複雑な社会で活躍するために必要な素養を備えた「グローバル人材」の概念は、第1表のように整理されている。

(2) グローバル人材育成に関する国の取組

グローバル人材の育成を推進し、世界のグローバル化に対応していくための基本的な問題意識として、次の二つが示された(第2表)。

**第2表 グローバル化に対応していくための基本的な問題意識**

<b>海外留学の動向と「内向き志向」</b>
経済成長の著しい中国やインドに比べて海外へ留学する若者が減少し、その差が拡大傾向にある。しかし、このような状況については、(若い世代の)意識の問題に安易に還元することなく、意識の背景となる社会システム上の構造的な要因を克服していくことが重要である。
<b>我が国の経済的な発展と国際社会との関わり</b>
現状のままでは、変化の激しいグローバル化時代の世界経済の中で、我が国は緩やかに後退していくのではない。そのような状況を回避するために、「世界の中の日本」を明確に意識するとともに、自らのアイデンティティを見つめ直すことが不可欠なのではないか。

(グローバル人材育成推進会議 2012 pp. 3-7 より作成)

国は、これらの問題意識に対応するためには社会全体のシステムをグローバル化にふさわしいものへと変革していく必要があり、その眼目といえるのが国家戦略の一環としてのグローバル人材の育成にほかならないとした上で、次の五つの施策を掲げ、グローバル化等に対応する人材力の強化に取り組むこととした。

<ul style="list-style-type: none"> <li>・国家公務員試験や大学入試等へのTOEFL等の活用</li> <li>・意欲と能力のある若者全員への留学機会の付与</li> <li>・<u>グローバル化に対応した教育を牽引する学校群の形成</u></li> <li>・初等中等教育段階からの英語教育の強化</li> <li>・産業界のニーズに対応した学び直し機会の拡大</li> </ul>
--

(日本経済再生本部 2013 pp. 37-38 下線は筆者)

「グローバル化に対応した教育を牽引する学校群の形成」として、二つの取組が示されている。そのうちの一つはスーパーグローバルハイスクール(SGH)であり、もう一つが国際バカロレア(IB)である。IBの導入については、「一部日本語による国際バカロレアの教育プログラムの開発・導入等を通じ、国際バカロレア認定校等の大幅な増加を目指す(2018年までに200校)」(日本経済再生本部 2013 p. 38)とした。

(3) グローバル人材育成に関する本県の取組

神奈川県は、平成19年8月に策定、平成27年10月に一部改定した「かながわ教育ビジョン」の「学び高め合う学校教育」の中に「グローバル化などに対応した教育の推進」を掲げている。重点的な取組として、逆さま歴史教育などの学習活動の工夫と充実、ICT活用教育、理数教育、環境教育等の推進などを置き、

「国際バカロレア認定校の設置」をその一つに位置付けている。

また、「県立高校改革実施計画(I期)」における「グローバル化に対応した先進的な教育の推進」として、グローバル教育研究推進校(6校)、国際バカロレア認定推進校(1校)を指定し(第3表)、これらの学校が県内のグローバル教育に係る取組を牽引している。その取組の成果は、毎年11月に実施される教育課程説明会や、12月に実施される地域別研究成果発表会等において発信されている。

なお、横浜国際高校は、平成26年度から5年間、スーパーグローバルハイスクール(SGH)に指定され、「気づき、考え、行動するグローバル・リーダー」の育成を目指した研究開発にも取り組んでいる。

**第3表 県立高校改革実施計画(I期)のグローバル化に対応した先進的な教育の推進に係る指定校**

<b>グローバル教育研究推進校(6校)</b>
神奈川総合高校、横浜平沼高校、横須賀明光高校*、鎌倉高校*、小田原高校*、大和西高校 ※*を付した3校の指定は、平成30年度で終了する。平成31年度から県立高校改革実施計画(II期)指定校として、新たに、川和高校、鶴嶺高校、伊志田高校が加わる。
<b>国際バカロレア認定推進校(1校)</b>
横浜国際高校

**2 グローバル人材育成に関するアンケート**

これまで述べてきたように、本県においては、研究推進校等を中心に、県全体でグローバル化に対応した教育の充実に取り組んでいる。本研究では、研究推進校等に限らず様々な学校で実施している取組の内容とそれに携わる教職員の意識を知るために、「グローバル人材育成に関するアンケート」を実施した。

(1) アンケート調査の概要

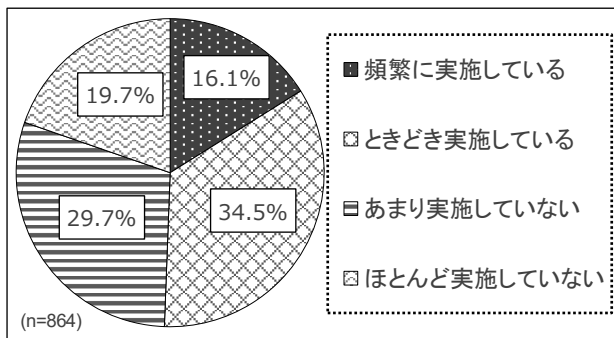
<ul style="list-style-type: none"> <li>・実施期日 平成30年8月～平成30年11月</li> <li>・調査対象者 高等学校・中等教育学校教職員のうち基本研修(初任者研修、5年経験者研修、中堅教諭等資質向上研修)の受講者(867人)</li> <li>・調査内容 <ul style="list-style-type: none"> <li>①日頃の教育活動における、グローバル人材の育成に向けた回答者自身の取組の実施状況(選択[4件法]・記述) ※第1表に記載の「グローバル人材」に求められる要素Ⅰ・Ⅱ・Ⅲごとに調査</li> <li>②「グローバル人材の育成」に向けた取組を実施する上で悩んだり困ったりしていること(記述)</li> <li>③予測困難な時代を生き抜くために、子どもたちに育成することが重要だと思う力(記述) ※各回答の関連性については分析対象としていない。</li> </ul> </li> </ul>
--

(2) アンケート調査の結果

調査の結果から見えたことを次に示す。

ア 「グローバル人材」に求められる要素Ⅰについて  
2(1)①「『語学力・コミュニケーション能力』の育成を目的とした活動を、どの程度実施していますか。」という質問に対しては、50.6%の教職員が頻繁にまたはときどき実施していると回答した(第1図)。

教科別に見ると、語学力の育成を目指した活動が重視される外国語科が最も多く87.5%、続いて、家庭科60.9%、芸術科55.6%、国語科55.1%の順であった。



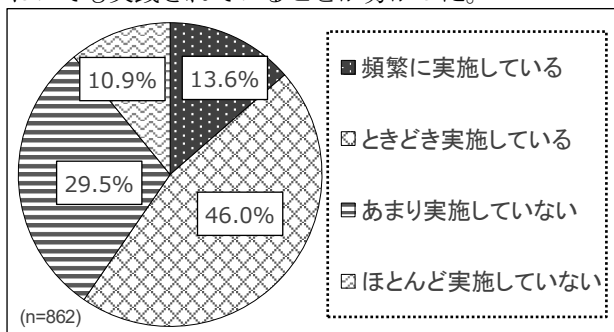
第1図 要素Ⅰの育成を目的とした活動の実施状況  
次のような活動が、例として挙げられた。

- 語学力の育成に関するもの  
英語による表現活動、リスニング、ディスカッション、語学研修、姉妹校交流
- コミュニケーション能力の育成に関するもの  
一つの問いや題材に関する対話型の授業展開、実験や実習における協働学習や発表

イ 「グローバル人材」に求められる要素Ⅱについて

2(1)①「『主体性・積極性、チャレンジ精神、協調性・柔軟性、責任感・使命感』の育成を目的とした活動を、どの程度実施していますか。」という質問に対しては、59.6%の教職員が頻繁にまたはときどき実施していると回答した(第2図)。

職業教育を主とする専門学科の原則履修科目である「課題研究」において、課題解決を目的とした学習に取り組んでいることもあり、専門教科の割合が75.0%と最も高かった。その他の教科についても、家庭科73.9%、保健体育科71.7%と、実習や実技の機会が多い教科の割合が高い傾向が見られた。また、特別活動や部活動における取組の例もあり、授業以外の場面においても実践されていることが分かった。



第2図 要素Ⅱの育成を目的とした活動の実施状況

次のような活動が、例として挙げられた。

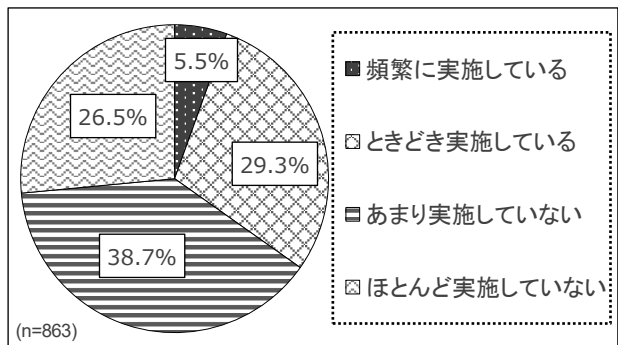
- ・総合的な学習の時間における探究的な学習
- ・難易度の高い問題を題材としたグループ学習
- ・学校行事や部活動における主体的な取組

ウ 「グローバル人材」に求められる要素Ⅲについて

2(1)①「『異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティー』の育成を目的とした活動を、どの程度実施していますか。」という質問に対して、頻繁にまたはときどき実施していると回答した教職員の割合は34.8%であり、他の二つと比較すると低かった(第3図)。

この項目についての取組が目立ったのは、芸術科61.1%、地歴・公民科59.5%、外国語科57.4%であった。芸術科や地歴・公民科では、授業の中で、日本や諸外国の歴史、文化、宗教等を題材とする機会が多く、また、外国語科では、教科書のトピックから話題を広げたり、ALTの出身国の歴史や文化等を題材としたリスニングやスピーキングの活動を行ったりしているためと考えられる。

この質問については、「日本人としてのアイデンティティーとは何を指しているのか。」、「いろいろな背景をもった生徒がいる中で、一律に『日本人』という概念を用いてよいものか。」等の、教育現場における多様性に配慮することが必要であることを示す意見が散見された。このような意識が、要素Ⅲの育成を目的とした活動の実施の割合が低いことの要因の一つといえるのではないだろうか。



第3図 要素Ⅲの育成を目的とした活動の実施状況  
次のような活動が、例として挙げられた。

- ・鑑賞の授業における日本と他国の文化比較
- ・国際ボランティア活動への参加
- ・外国につながる生徒による自国文化紹介
- ・外部講師による多文化をテーマとした講演会

エ グローバル人材育成に向けた取組を実施する上での悩みについて

これまで様々な学校で実施している取組の状況について述べてきたが、取組が意図したとおりに進まないこともある。2(1)②「『グローバル人材の育成』に向けた取組を実施する上で、悩んだり困ったりしていること」についての記述内容を分析し、二つに分類した。

主な内容は第4表のとおりである。

第4表 「グローバル人材の育成」に向けた取組を実施する上での悩み

教職員の業務負担に関すること
・取り組みたくても時間的な余裕がない。 ・特定の教科やグループに負担が集中してしまう。
取組の方策に関すること
・実践事例等がなく、取り組み方が分からない。 ・生徒の基礎学力が不足しており、取組が困難である。 ・教科を越えた連携や組織的な取組が必要だと思う。

オ 子どもたちに育成することを目指す力について  
2 (1)③「変化の激しい予測困難な時代を生き抜くために、子どもたちにどのような力を育成することが重要だと思いますか。」という質問への回答と「『グローバル人材』の概念」(第1表)との相関を調べた。回答に使用されている表現を、「①②③『グローバル人材』に求められる要素Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」、「④その他の資質(『グローバル人材』に限らずこれからの社会の中核を支える人材に共通して求められる資質)」、いずれにも「⑤該当しないと整理したもの」の5項目に分類した。回答の中に見られた、各項目の概念(第1表)の内容以外の表現の例を、第5表に示す。

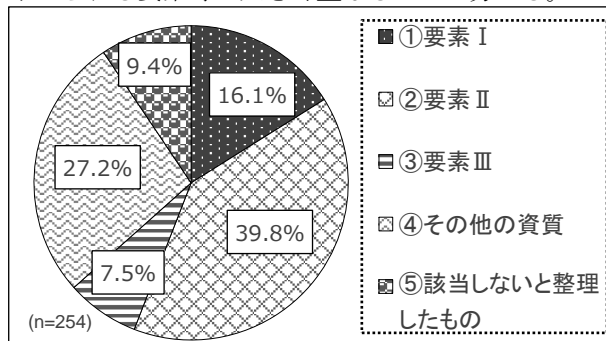
第5表 「生徒に育成することを目指す力」の回答に使用されている表現の例

① 要素Ⅰ：語学力・コミュニケーション能力
話を聞く力、表現力、国語の能力、適切に伝える力、周囲に助けを求めることのできる力、人に好かれる力
② 要素Ⅱ：主体性・積極性、チャレンジ精神、協調性・柔軟性、責任感・使命感
知識を活用する力、対応力、好奇心、応用・実践力、自己決定力、創造力、何事もプラスに捉える力、しなやかさ、いい加減さ、自主・自律、型にはまらない、論理的な、自ら考える、問題意識を持つ
③ 要素Ⅲ：異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティー
多様な、多角的な、他者を知る、自国の文化理解
④ その他の資質：「グローバル人材」に限らずこれからの社会の中核を支える人材に共通して求められる資質
思いやる、批判的に見る、問いを立てる、異なる考えを認める、(基礎)学力、思考力、判断力、注意力、観察力、想像力、情報活用能力、情報処理能力、広い視野
⑤ 該当しないと整理したもの
生活習慣の確立、体力、一人でも生きていける力、セルフマネジメント、自己統制力、自分を客観的に見る、自分の長所を知り伸ばそうとする、時間の有効活用、将来を見据える、自分の学びを価値付ける、自分は何がしたいかや何ができるかを考える

※これらは主なものである。また、複数の項目に該当するものもある。

教職員が「生徒に育成することを目指す力」と考える

る力を「『グローバル人材』の概念」の「①要素Ⅰ」から「④その他の資質」に分類した割合を合わせると90.6%になる(第4図)。この相関結果から、回答した教職員の多くが考える予測困難な時代を生き抜くために必要な力は、第1表に示した「グローバル人材」に求められる要素等と大きく重なることが分かる。



第4図 「生徒に育成することを目指す力」と「『グローバル人材』の概念」の重なり

また、「⑤該当しないと整理したもの(9.4%)」の中には、「セルフマネジメント」、「将来を見据える」、「自分の学びを価値付ける」等の記述が見られる。これらは、「答申」において「主体的に学習に取り組む態度も含めた学びに向かう力や、自己の感情や行動を統制する能力、自らの思考の過程等を客観的に捉える力など、いわゆる『メタ認知』(中央教育審議会 2016 pp. 30-31)とされている力に通じる。国は、こうした力は社会を生き抜く力につながるという観点から重要であるとしている。

(3) アンケート調査の結果の考察

アンケート調査の結果から、本県の高等学校段階におけるグローバル人材の育成については、教科等によって扱う内容や量に差はあるものの、様々な教育活動を通じて取組が工夫されていることが分かった。一方で、教職員の業務負担や取組の方策に関することについての課題も浮き彫りになった。

それでもなお、多くの教職員が「生徒に育成することを目指す力」と考える力は、グローバル人材に求められる要素等とほぼ一致している。また、「日本人としてのアイデンティティー」という言葉の捉え方や「メタ認知」の重要性についてなどへの意見から、多様化、複雑化の進む社会を生き抜いていくための力とはどのようなものかということが、教職員の中で具体的にイメージされていることが分かった。

グローバル教育の推進のためには、育成を目指す生徒像、その育成のために実施している取組や学習活動のアイディア等を、まず校内で共有することが大切である。そして、取組を特定の教科やグループ等の業務に限定せず、教科等を越えて学校全体として行う意識を持つことが重要なのではないだろうか。そうした取組の一層の充実のためのヒントが、国際バカロレアの教育理念や手法の中にあるのではないかと考える。

### 3 国際バカロレア(I B)の教育

#### (1) 国際バカロレアの意義

国際バカロレアの意義について、平成29年5月の「国際バカロレアを中心としたグローバル人材育成を考える有識者会議中間取りまとめ」を参考に記す。

国際バカロレア(I B)は、全人教育を通じて、主体性とバランス感覚を兼ね備えた、国際社会で貢献できる人材の育成を目的とする国際的な教育プログラムである。独自のカリキュラムと双方向・協働型授業を特徴とし、グローバル化に対応した素養・能力を育成することを目指している。高等学校段階のディプロマ・プログラム(DP) (以下「DP」と表記することもある)は、国際的に通用する大学入試資格(I B資格)として、世界各国の大学入学者選抜において広く活用されている。

日本においては、昭和54年から、学校教育法に基づき、国際バカロレア資格を有する18歳に達した者を、高等学校を卒業した者と同等以上の学力があると認められる者として指定している。DPは、原則として、英語、フランス語又はスペイン語で実施されるため、国内におけるDP実施校についてはインターナショナルスクールが中心であったが、平成25年からは、I B機構との協力の下、DPの科目の一部を日本語でも実施可能とするデュアルランゲージ・ディプロマ・プログラム(いわゆる「日本語DP」)の開発を行い、一般の高等学校等における普及の拡大を図っている。

日本の教育政策が「主体的・対話的で深い学び」等を重視する中、高等学校等における日本語DPの活用を通じてI B校を増加させていくことは、グローバル化に対応した学校というだけでなく、初等中等教育段階における特色ある学校を構築するための施策としても有効であると考えられる。

また、教科横断的な教育内容の設定や主体的な学びに対する評価等については、日本語DPの導入校が国内初等中等教育における主体的な学びについての参考事例となることが期待される。さらに、母語(日本語)にも重点を置くとともに、日本の学習指導要領との親和性を高めた我が国のI B教育が、国内において普及していくことも期待される。

#### (2) 国際バカロレアの教育理念

##### ア I Bの使命

国際バカロレア(I B)は、「I Bの使命」に基づいたプログラムを通じて、「国際的な視野」を持った人間を育成することをねらいとしている。

##### I Bの使命 (IB mission statement)

国際バカロレア(I B)は、多様な文化の理解と尊重の精神を通じて、より良い、より平和な世界を築くことに貢献する、探究心、知識、思いやりに富んだ若者の育成を目的としています。

この目的のため、I Bは、学校や政府、国際機関と協

力しながら、チャレンジに満ちた国際教育プログラムと厳格な評価の仕組みの開発に取り組んでいます。

I Bのプログラムは、世界各地で学ぶ児童生徒に、人がもつ違いを違いとして理解し、自分と異なる考えの人々にもそれぞれの正しさがあり得ると認めることのできる人として、積極的に、そして共感する心をもって生涯にわたって学び続けるよう働きかけています。

(非営利教育財団 国際バカロレア機構 2017 p. 1)

##### イ I Bの学習者像

「I Bの使命」の実現のため、I B認定校は、価値を置く人間性を10の学習者像として表し、より良い世界を築くことに貢献できる児童・生徒の育成に取り組んでいる。

##### I Bの学習者像 (IB Learner Profile)

Inquirers 「探究する人」  
Knowledgeable 「知識のある人」  
Thinkers 「考える人」  
Communicators 「コミュニケーションができる人」  
Principled 「信念をもつ人」  
Open-minded 「心を開く人」  
Caring 「思いやりのある人」  
Risk-takers 「挑戦する人」  
Balanced 「バランスのとれた人」  
Reflective 「振り返りができる人」

(非営利教育財団 国際バカロレア機構 2017 より作成)

##### ウ I Bのプログラム

I Bには、3歳から19歳までの児童・生徒の年齢に応じた四つのプログラムがある(第6表)。

第6表 I Bのプログラム

プログラム名	対象年齢	日本の該当学年・対象
プライマリー・イヤーズ・プログラム(PYP)	3～12歳	幼稚園・保育園から小学6年生まで
ミドル・イヤーズ・プログラム(MYP)	11～16歳	小学6年生から高校1年生まで
ディプロマ・プログラム(DP)	16～19歳	大学進学を目指す高校2・3年生
キャリア関連プログラム(CP)	16～19歳	キャリア教育・職業教育に関連した高校2・3年生

(文部科学省HP「国際バカロレアについて」より作成)

#### (3) ディプロマ・プログラムの学び

##### ア DPのカリキュラム

赤塚はディプロマ・プログラム(DP)について、「生徒が思いやりを持ち、分析的に考えることができ、生涯を通して学習に励み、責任感のある良き社会の一員となるよう構成されて」おり、「生徒がこれまでに得た知識や経験を生かしながら学習を深め、教師と生徒、生徒同士が双方向で議論を深めたり、討論を実施したりしながら課題解決に向けた探究型の授業を特徴」(赤塚 2018)としていると述べている。

DPのカリキュラムは、六つの科目グループ及び「コア」と呼ばれる三つの必修要件から構成され、六つの

科目グループが、中心となる「コア」を取り囲んだ形のモデル図で表される(第5図)。



第5図 DPのプログラムモデル

(非営利教育財団 国際バカロレア機構 2014 p. 2)

生徒は、六つのグループから1科目ずつ選択し、6科目を2年間で学習する。ただし、「芸術」(グループ6)は他のグループからの科目に代えることもできる。また、大学やその後の職業において必要となる専門分野の知識やスキルを、大学入学前の段階で準備しておく観点から、6科目のうち3～4科目を上級レベル(HL、各240時間)、その他を標準レベル(SL、各150時間)として学習する。さらにカリキュラムの中核となる「コア」として、三つの必修要件を並行して履修する。

六つのグループと科目は第7表のとおりである。また、カリキュラムの中核となる「コア」必修要件については、第8表のとおりである。なお、国は、「答申」において、「総合的な探究の時間」の一層の充実のために参考にすべきものとして「知の理論」に触れている。

第7表 DPのグループと科目

グループ名	科目名
1 言語と文学 (母国語)	言語A：文学、言語A：言語と文学、文学と演劇(※)
2 言語の習得 (外国語)	言語B、初級語学
3 個人と社会	ビジネス、経済、地理、グローバル政治、歴史、心理学、環境システムと社会(※)、情報テクノロジーとグローバル社会、哲学、社会・文化人類学、世界の宗教
4 理科	生物、化学、物理、デザインテクノロジー、環境システムと社会(※)、コンピュータ科学、スポーツ・運動・健康科学
5 数学	数学スタディーズ、数学SL、数学HL、数学FHL
6 芸術	音楽、美術、ダンス、フィルム、文学と演劇(※)

(※) なお、「文学と演劇」はグループ1と6の横断科目。「環境システムと社会」はグループ3と4の横断科目。また、「世界の宗教」および「スポーツ・運動・健康科学」はSLのみ。

(文部科学省HP「国際バカロレアについて」より作成)

第8表 DP「コア」必修要件

課題論文 (E E : Extended Essay)
履修科目に関連した研究分野について個人研究に取り組み、研究成果を4,000語(日本語の場合は8,000字)の論文にまとめる。
知の理論 (TOK : Theory of Knowledge)
「知識の本質」について考え、「知識に関する主張」を分析し、知識の構築に関する問いを探究する。批判的思考を培い、生徒が自分なりのものの見方や、他人との違いを自覚できるよう促す。最低100時間の学習。
創造性・活動・奉仕 (C A S : Creativity/Activity/Service)
創造的思考を伴う芸術などの活動、身体的活動、無報酬での自発的な交流活動といった体験的な学習に取り組む。

(文部科学省HP「国際バカロレアについて」より作成)

#### イ DPの評価とIB資格

国際バカロレア資格の取得には、DPのカリキュラムを全て履修し、外部評価(国際バカロレア試験等)及び内部評価を通じて、45点満点中、原則として24点以上を取得する必要がある。国際バカロレア試験は、年2回、世界で一斉に実施され、多くの日本国内の高等学校等では3年次の11月に実施される。

#### ウ IBの教育手法

IBプログラムの教育手法のうち、ここでは「学習の方法(ATL)」を紹介する。五つのスキルから成るATLスキルは「IBの学習者像」の特質とともに全てのプログラムにおいて重視されるものである。

#### 学習の方法 (Approaches to learning)

Thinking skills 「思考スキル」
Communication skills 「コミュニケーションスキル」
Social skills 「社会性スキル」
Self-management skills 「自己管理スキル」
Research skills 「リサーチスキル」

「学習の方法(ATL)」は、DPのプログラムモデル(第5図)において、中核となる「IBの学習者像」のすぐ外側に据えられている。これら五つのスキルには密接なつながりと重複する領域があり、相互に関連するものと捉えられている。DPの生徒は、各科目の中でこれらのスキルを学びながら学習に取り組む。

#### 4 国際バカロレアの教育理念や手法を参考にした取組

横浜国際高校では、国際バカロレア認定に向けた準備の一環として、現行の学習指導要領の下で、IBの教育理念や手法を参考にした取組を実施してきた。ここで紹介する二つの授業では、IBの学びだけでなく学習指導要領でも重視される、事象を多角的・批判的に考察する探究活動や、知識や経験をいかしながら議論を深め、協働して課題解決に向かう学習等を意図した取組が実践されているので、広く参考にしていきたい。

(1) 授業実践事例1 (数学・数学I)

ア 単元(題材)名: データの分析

イ 単元(題材)で身に付けさせたい力

社会の事象などから設定した問題について、データの散らばりや変量間の関係などに着目し、適切な手法を選択して分析を行い、問題を解決したり、解決の過程や結果を批判的に考察し判断したりする力。

ウ 単元(題材)の評価規準

関心・意欲・態度(a)	統計が日常生活でどのように活用されているかを知り、自ら統計を用いた思考を活用しようとしている。
数学的な見方や考え方(b)	不確実な事象の起こりやすさに着目し、主張の妥当性について実験等を通して判断したり、批判的に考察したりすることができる。
数学的な技能(c)	目的に応じて複数の種類のデータを収集し、適切な統計量やグラフ、手法などを選択して分析を行い、データの傾向を把握して事象の特徴を表現することができる。
知識・理解(d)	コンピュータなどの情報機器を用いてデータを表やグラフに整理したり、分散や標準偏差などの基本的な統計量を求めたりする方法を理解している。

エ 単元(題材)の指導と評価の計画

時	学習内容・学習活動	評価規準			
		a	b	c	d
1 ～ 4	データの散らばり具合や傾向を数値化する方法を考察する。	○			
5 ～ 8	目的に応じて複数の種類のデータを収集し、適切な統計量やグラフ、手法などを選択して分析を行い、データの傾向を把握して事象の特徴を表現する。	○		○	
9 ～ 12	不確実な事象の起こりやすさに着目し、主張の妥当性について、実験などを通して判断したり、批判的に考察したりする。		○		○

オ 学習活動の内容と指導のねらい

第1時の授業における主な学習活動の内容と指導のねらいは次のとおりである。

	学習活動の内容	指導のねらい
導入	・携帯電話の売上に関する記事を通じて、数量データがどのように活用されているかを読み取り、統計の定義を確認する。	・身近な話題の中の本物の数値を用いて、統計的手法の有用性を実感させる。
展開	・約20項目の「生活に関するアンケート」に生徒全員がスマートフォン等を用いて回答し、授業者はそのデータをすぐに集計し、提示する。	・生きたデータを教材として活用することにより、統計の面白さを効果的に伝える。

展開	<p>※アンケート項目の例</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・一日の睡眠時間/勉強時間/スマートフォンの使用時間等</li> <li>・学校生活/学習成績/人生に満足しているか等</li> </ul> <p>・表計算ソフトを用いて提示されたデータから相関係数に着目して分析し、結論を導き出し、文章化する。</p> <p>・導いた結論を周囲と共有し、その妥当性を検討する。</p> <p>※導き出される結論の例</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・学習成績への満足度と勉強時間には正の相関が見られることから、勉強熱心な人ほど良い成績を収めていると考えられる。</li> </ul> <p>・作為的な結論を導くような記事を書き、問題点を指摘する。</p> <p>※作為的な結論を導く記事の例</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・スマートフォンの使用時間と学校生活への満足度には正の相関が見られる。</li> <li>→スマートフォンのおかげでコミュニケーションが活発になり、友達が増えた!(携帯電話会社等が宣伝に使う可能性がある)</li> </ul>	<p>・データを分析し、根拠に基づいて結論を導き出す活動を通して、統計的探究の姿勢を養う。</p> <p>・導いた結論を周囲と共有、検討することにより、考えをより良いものにさせる。</p> <p>・統計が作為的な結論を導くことがあることを知り、批判的に読むことの重要性を認識させる。</p>
振り返り	<p>・統計によってだまされないようにするために留意する点や、統計を活用する際のデータの信頼性を高めるために明らかにすべき点などについて考える。</p>	<p>・統計の仕組みを理解して、正しく読み、正しく使えるようになることが必要であることを確認する。</p>

カ 学習活動の成果

ICT機器やインターネットを効果的に活用し、教科書等に載っている既存のものではない、生きたデータを教材とすることにより、生徒の興味・関心が存分に引き出された。

分析したデータから導き出される結論を文章化する活動を通して、統計的探究の姿勢の育成を目指した。また、作為的な結論を導く記事を作成する活動により批判的に考察する機会を設定した。生活の中にかせると実感できるような学習活動の設定により、身に付けた知識や技能が生きて働くものとなる様子を見ることができた。

(2) 授業実践事例2 (国際・国際理解<sup>2)</sup>)

ア 単元(題材)名: グローバルビジネス

イ 単元(題材)で身に付けさせたい力

グローバルビジネスを理解するために、歴史、文化、環境に関して獲得した知識をプレゼンテーションのス

ライドにまとめた上で、批判的に分析し、課題に対する自分なりの解決策をクラス全体に示す力、及び、自分の考えを主張するとともに、他者の意見を聞き、多角的に幅広く国際社会の現状について考える力。

ウ 単元(題材)の評価規準

関心・意欲・態度(a)	グローバルビジネスに関心を持ち、意欲的に課題を追究している。
思考・判断・表現(b)	グローバルビジネスにおける課題を見だし、批判的に考察することができる。
資料活用(機能)(c)	必要な資料を収集し、有用な情報を適切に選択し、活用することができる。
知識・理解(d)	グローバルビジネスに関する知識を持ち、理解している。

エ 単元(題材)の指導と評価の計画

時	学習内容・学習活動	評価規準			
		a	b	c	d
1 2	題材(グローバルビジネス)を描いたドキュメンタリーを視聴し、意見や感想を伝え合う。プレゼンテーションに向けてのポイントや留意点を確認する。	○			○
3 9	各自が題材(グローバルビジネス)に応じたテーマを設定し、プレゼンテーションを行う。その内容を踏まえて、全体でディスカッションを行うことを通して様々な見方や考え方に触れ、事象を多角的に捉える力を身に付ける。		○	○	

オ 学習活動の内容と指導のねらい

題材を通した主な学習活動の内容と指導のねらいは次のとおりである。

	学習活動の内容	指導のねらい
資料作成	・コンピュータを活用して、聞き手の目線に立った、分かりやすいスライド資料を作成する。	・ICTスキルの伸長を目指す。 ・信頼性の高い資料に基づいて知識を獲得する重要性を理解させる。
発表・議論	・設定したテーマについて、一人20分間でプレゼンテーションを行い、その内容について、質疑応答及びディスカッションを行う。 ・発表者は発表の最後に、自分自身の「グローバル化に対する考察」を示す。	・確かな知識に基づいて発表をさせる。 ・意見や疑問を自由に発言できる雰囲気をつくり、議論を広げ深めさせる。

発表・議論	※テーマ設定の例 「関税と自由貿易」 ・為替条項、TPP等のキーワードの説明をしながら、自由貿易の利点と欠点について議論する。	
振り返り	・各自、その時間に扱ったテーマについて学んだことや意見等をまとめ、提出する。	・振り返りの内容はデータで提出させ、次の時間にフィードバックする。

カ 学習活動の成果

発表者が示した「グローバル化に対する考察」において、「『グローバル化』という言葉は良いものというイメージで捉えられがちであるが、必ずしもそうではないと思う。様々なものを世界標準にそろえることで、失われるべきでないものまで失われてしまう可能性がある。言語や文化などの民族のアイデンティティは決して競合すべきものでない。」という発言があった。

国際社会の現状について主体的に学び、獲得した知識や自分の考えを基に他者と議論することにより、学びが更に深まった。国際社会の現状を批判的・多角的に捉え、あるべきグローバル社会の姿について、自分なりの考えを持ち、主張していた。

(3) 取組を通して見られた変容

横浜国際高校では、IB研究グループが中心となってIB教育について研究し、認定に向けた取組を進めてきた。ここに紹介した事例以外にも、教育活動の様々な場面で、批判的に考察したり探究したりする活動を取り入れるなど、IBの教育手法を参考にした工夫が見られる。それらを通じて生徒がどのように変容したか、IB研究グループの教職員が感じていることについて話を聞き、次にまとめた。

質問：IBの手法を参考にした取組を通じて、生徒にどのような変容が見られましたか。
・自分の言葉で書く力、語る力が向上した。
・知識の重要性を理解し、論理的に思考・表現しようとする探究的態度が見えるようになった。
・複数の事象を比較し、共通点・相違点を見出す力が付いた。
・何を知らないから語れないのか、何をどう調べると語れるようになるかを探し、行動するようになった。
・自分の意見を持ち、思考したり表現したりすることを楽しむ姿が多く見られるようになった。

取組を牽引するIB研究グループの教職員から「思考するプロセスを自分たちも楽しんでいる」、「教科が違ってもキーワードや方向性は共通であると認識し



ている」、「『教科』というborder(境界線)がなくなっていく感覚がある」などの発言があった。こうした発言は、IB教育の実践を通じて、生徒と共に成長し変化していこうとする教職員の高い意識の表れであると感じた。

IBの教育理念や手法を参考にした取組を通じて教職員が実感したこれらのことは、論理的思考力、探究活動、教科等横断的な学び等の、新学習指導要領が目指す方向性とも大いに重なっている。

## 研究のまとめ

### 1 研究の成果

教職員を対象としたアンケート調査の実施により、本県におけるこれまでのグローバル人材育成に向けた具体的な教育活動の内容や、取組に関する教職員の意識について知ることができた。また、調査結果の分析により、教職員が感じている課題や、生徒に育成すべきであると考えている力について整理し、示すことができた。

国際バカロレア(IB)の教育は、学習指導要領が目指す方向性と重なる。本研究では、IBの教育理念や手法を整理し、それらを参考にした取組の例として横浜国際高校における実践を紹介した。こうした先進的な取組の中に、各学校におけるグローバル教育の更なる推進のためのヒントがあるものとする。

### 2 今後の展望

複雑化、多様化が急速に進む社会を生き抜く子どもたちを育成するには、IB教育において重視される批判的思考や探究活動への取組が有効であろう。前述のとおり、こうした学びの重要性は新学習指導要領が目指す方向性とも一致しており、全ての学校の取組に直結するものである。したがって、本県においては、横浜国際高校がIBに認定された後も、同校のIB認定校としての取組を様々な場面で継続的に発信することが大切である。IB認定校としての実践は、「主体的・対話的で深い学び」の取組にも通じるため、各学校がそれを参考にすることにより、県全体の教育活動の充実が期待できる。

グローバル人材に求められる要素は多岐に渡っている。各学校においては、教科の学習だけではなく、教育活動全体を通じてグローバル人材の育成を図っていくという視点に立って取り組む必要がある。取組には必ずしも新たなことを始めるということではなく、「『グローバル人材』に求められる要素」を各学校が育成を目指す生徒像にいかすアプローチも有効ではないかと考える。そして、各学校の現状に応じた取組を積み重ねることが、これからの社会を生き抜く生徒を育てることにつながるのではないだろうか。

## おわりに

高度情報化社会においては、国境を越えて絶え間なく様々な情報が行き交っている。今後、ますます情報化の進む社会では、たとえ一度も海外へは行かず、一生を日本国内で過ごす人であっても、グローバル社会の中で生きていくことになる。そのようなことを考慮すると、グローバル教育は決して海外で活躍する人のためだけのものではない。どの子どもにとっても、生きていく上で、グローバル人材に必要な素養を身に付けていくことは大切であるとする。

DP「コア」必修要件(第8表)のCASの活動に当たっては、Think globally, act locally. (グローバルに考え、ローカルに行動する)という行動原則に沿って、CASの活動を大きな文脈の中で捉えることが重要であるとされている(非営利教育財団 国際バカロレア機構 2014 p. 4)。地球規模の視野を持ち、地域社会において自分にできる活動をするという、もの見方や考え方を身に付けることは、必ずや子どもたちがグローバル社会で生きていくための支えとなるであろう。

最後に、本研究に係るアンケートに協力して下さった教職員の皆様、また、研究内容の充実のために多大な御協力を下さった横浜国際高等学校の皆様にご心より感謝申し上げます。

[助言者]

早稲田大学本庄高等学院 教諭 赤塚 祐哉

## 引用文献

- グローバル人材育成推進会議 2012 「グローバル人材育成戦略(グローバル人材育成推進会議 審議まとめ)」  
<https://www.kantei.go.jp/jp/singi/global/1206011matome.pdf> (2019年1月取得)
- 中央教育審議会 2016 「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について(答申)」  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/\\_icsFiles/afieldfile/2017/01/10/1380902\\_0.pdf](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/_icsFiles/afieldfile/2017/01/10/1380902_0.pdf) (2019年1月取得)
- 日本経済再生本部 2013 「日本再興戦略 -JAPAN is BACK-」  
[http://www.kantei.go.jp/jp/singi/keizaisaisai/pdf/saikou\\_jpn.pdf](http://www.kantei.go.jp/jp/singi/keizaisaisai/pdf/saikou_jpn.pdf) (2019年1月取得)
- 赤塚祐哉 2018 『国際バカロレアの英語授業-世界標準の英語教育とその実践』 松柏社 p. 9
- 大迫弘和 2016 『日本標準ブックレット No. 17 アクティブ・ラーニングとしての国際バカロレア-「覚える君」から「考える君」へ-』 日本標準 pp. 5-6

## 参考文献

- 神奈川県教育委員会 2007(2015 一部改定) 「かながわ教育ビジョン」  
<http://www.pref.kanagawa.jp/docs/u5t/cnt/f4816/documents/796284.pdf> (2019年1月取得)
- 神奈川県教育委員会 2016 「県立高校改革実施計画 (I期)」  
[http://www.pref.kanagawa.jp/docs/u5t/cnt/f531868/documents/1218148\\_4405898\\_misc.pdf](http://www.pref.kanagawa.jp/docs/u5t/cnt/f531868/documents/1218148_4405898_misc.pdf)  
(2019年1月取得)
- 神奈川県教育委員会 2018 「県立高校改革実施計画 (II期)」  
<http://www.pref.kanagawa.jp/docs/u5t/cnt/f531868/documents/jissikeikaku-2ki.pdf> (2019年1月取得)
- 神奈川県立横浜国際高等学校 (n. d.)  
<http://yokohamakokusai-h.pen-kanagawa.ed.jp/>  
(2019年1月取得)
- 国際バカロレアを中心としたグローバル人材育成を考える有識者会議 2017 「国際バカロレアを中心としたグローバル人材育成を考える有識者会議 中間取りまとめ」  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/houdou/29/05/\\_icsFiles/afieldfile/2017/05/26/1385712\\_001\\_2.pdf](http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/29/05/_icsFiles/afieldfile/2017/05/26/1385712_001_2.pdf) (2019年1月取得)
- 非営利教育財団 国際バカロレア機構 2014 「『創造性・活動・奉仕』(CAS)指導の手引き」  
<https://www.ibo.org/globalassets/publications/cas-guide-jp.pdf> (2019年1月取得)
- 非営利教育財団 国際バカロレア機構 2015 「『指導の方法』と『学習の方法』」  
[https://ibpublishing.ibo.org/dpatln/apps/dpatl/guide.html?doc=d\\_0\\_dpatl\\_gui\\_1502\\_1\\_j&part=1&chapter=1](https://ibpublishing.ibo.org/dpatln/apps/dpatl/guide.html?doc=d_0_dpatl_gui_1502_1_j&part=1&chapter=1) (2019年1月取得)
- 非営利教育財団 国際バカロレア機構 2017 「国際バカロレア (IB) の教育とは？」  
<https://www.ibo.org/globalassets/digital-toolkit/brochures/what-is-an-ib-education-2017-jp.pdf> (2019年1月取得)
- 文部科学省 2011 「国際バカロレアについて」  
[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/kokusai/ib/index.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/ib/index.htm) (2019年1月取得)
- 文部科学省 2019 「IB教育推進コンソーシアム」  
<https://ibconsortium.mext.go.jp/> (2019年1月取得)